

ローマ

倉 田 稔

もくじ

はじめに

ローマ1

ローマ2

知人との再会

ローマ3

ローマ4

はじめに

2013年、ルネサンスの建築や美術の実物をほんの少しでも見ておこうと、ミラノ、ヴェネチア、フィレンツェ、ローマにだけ出かけた。次に2015年、トンマーゾ・カンパネッラを求める旅をし、ミラノからパドワ、ローマ、ナポリ、コゼンツァ、ステイロ、ローマと廻った。3回目には、1回目の旅が不足していたので、ミラノ、フィレンツェ、ローマと廻った。1回目のミラノは「イタリア、そしてミラノ」（『言語センター広報』第24号 2016年1月）で、ヴェネチアと1回目のフィレンツェについては、「ヴェネチアとフィレンツェの文化」（同、23号、2015年1月）で書いた。南イタリアのカラブリアについては「南イタリアの町々で」（同、24号）で書いた。ナポリについては「ナポリにて」を1から9まで、『ラブおたる』（坂の街出版）2016年7月から2017年3月まで連載した。1回目のローマの一部は「ローマ素通り ヴァチカンで」（『日伊協会支部広報』札幌、vol. 53、2015年5月号）で少し書いた。かつてのローマでの出来事について、『外国物語』（丘書房）、『ヨーロッパ 社会思想 小樽』（成文社）で少し書いた。そのためそれらを除いてここで書く。

ローマ 1

2013年8月17日 1回目

イタリア旅行の帰り、フィレンツェから鉄道でローマ・テルミニ駅に着いた。ローマのホテルは「アトランチコ」で、駅から歩いて1.2分なので便利ではある。四ツ星ホテルだが、あまり愛想は良くなかった。もちろん従業員次第でもある。古いエレベーターで、ドアが二重で戸の開け閉めを自ら行なう。もっともイタリアには古いエレベーターが使われている場合が多い。

フィレンツェで買ったワインがコルクの瓶だったので、ワイン抜きがなくて困った。ホテルに

もないという。夕食の店を探しに出たら、近くで土産物屋があったので、ワイン抜きを見つけて買った。売り子は中国人なので、愛想がない。我々の持つ案内ビラに書いてあるレストランをやっと見つけた。ジリオという。私はワインと仔牛、非常に柔らかいが、薄い二枚の肉である。イタリアの料理は沢山出ると思っていたが、そうでもないのかもしれない。ワイフはカルボナーラ。デザートは初めて取った。イタリアでは今までレストランでデザートは取らなかった。いつも時間をおいて他の場所でとった。色々な場所を知りたかったからである。ここでは私はプリン、ワイフはチョコレート・アイスをとった。老ウエイターが担当だ。サービスされたのか勘定では少し安くなった。隣にイタリア人の夫妻と思われる客が座っていた。スープから前菜、メイン、デザート、サラダ、デキャンタ入りの赤ワインまで、しっかり取っていた。イタリアでは平均月収が20万円くらいだから、普通はレストランなど滅多に入れないはずである。どうやらお金持ちのようである。

翌日、ヴァチカン宮殿とその美術案を見た。この話は「ローマ素通り」で書いたので、割愛したい。ヴァチカンから帰ってホテルに着くが、時間があまりすぎ、ちょっと散歩し、ホテルのロビーで迎えの車を待った。我々の旅には送迎があるのだ。中橋さんという運転手が来た。「日本人ですよ」と言う。車に乗ってお喋りをした。「ローマ遺跡観光やりますよ」と言う。その専門家らしい。ローマで新しく発見された遺跡も見べきだった。「イタリアでは乞食が多かった」と言う、「彼らは施設に入らないんですよ」と中橋さん。ローマ・フィウミチーノ空港は非常に大きい。構内電車で搭乗口まで移動するのだった。免税店で買い物をする。イタリアたばことチョコレートだ。ちょっとおやつを食べる。フィレンツェで食べたおいしいケーキがあったので、それを注文する。

イタリアに行く前に、スリが多いと脅かされていた。我々は盗られなかった。このころ1ユーロ138円だったので、イタリアは物価が高かった。ホテルでは野菜類が少なかったが、イタリア人はそれで大丈夫なのかと心配する。

ローマ2

2015年9月19日 二度目

パドヴァからローマ・テルミニ駅に着いた。ホテルは2年前に泊まった同じ「アトランティコ」なので、場所は覚えている。ホテルの近くのレストランで夕食をとった。なかなか愛想の良いウエイターだった。日本人もよく来るようだ。料理はおいしい。

20日。わがホテルは隣のホテルと共同経営らしい。間違っ隣のホテルの朝食会場に入ったが、「どちらでもよい」と言う。かつての場所とは雰囲気は違っていたので、質が落ちたのかと思ったものだ。

荷物が重くなったので、郵便で荷物的一部分を日本に送ろうと考えた。ホテルではダンボールがないと言う。郵便局の場所を教わったが、なかなか見つからない。やっと見つけて、初めに総合的な係に「荷物を送りたいのだが」と言うと、「ここでは送れない」との返事である。後日、イタリアに済む日本女性に、「中国人と間違われたのではないか」と言われたことがある。それはともかく、郵便局が荷物を送れないとは考えられないので、他の係に向かった。すると「ダンボールを買ってきて入れれば送る。白い紙に包んで」と言う。ダンボールはどこそこにあるから買う

と良いという。教わった通りに行って、いくら探してもそういう店はない。とうとう諦めた。その上、ダンボールが買えても、大きな白い紙を入手するのも大変だ。ちなみに後にフィレンツェの人は、荷物に店の宣伝などがなければよい、白い紙の必要は無いと言っていた。

昼前に出て、近くのバシリカ・ディ・サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂（偉大なる聖マリア聖堂）を見物に行く。ローマの四大バシリカの1つである。カトリック教会で、古代ローマ様式であり、5世紀に建てられ、その後、たびたび増改築された。ここは何度も見ていたのだが、そこが裏側とは気がつかなかった。ある時、教会の脇の坂道からバスが下ってきたので、何があるのか行ってみることにした。何と教会の正面がそこにあったのである。裏側だけでも充分立派だったので、すっかりこの裏側を正面だと思い込んで見とれていたのである。教会に入ることにした。入る前にムラノ・ガラスの店があったので、冷やかして入ってみる。この教会は立派なもので、ピエトロ・ベルリーニ（有名なジャンの父）は、この洗礼堂に「聖母被昇天」の大理石の浮き彫りを製作し、そのパオリーナ礼拝堂に「クレメンス8世の戴冠」を彫刻した。階下＝地下に礼拝堂が見える。この寺院の前には随分観光客がいる。そしてシティ観光ツアーの客引きが沢山いた。帰り際、道路の反対側の、かつて見たずいぶん古い近くのギリシャ風の教会をワイフはじっくり見た。内部は荘厳な感じだったそうだ。

知人との再会

夜6時半に、旧友・川端氏の未亡人（以下Iさんとする）と35年ぶりの再会である。この人は35年前、観光客が行くような所を一日たっぷり私を連れて、ローマ市内を案内してくれた。（拙書『外国物語』丘書房）

ホテルの前で待ち合わせであるが、車が止めにくいから、フロントでなくということだった。しかしうまく止められる所があったそうで、フロントで待っていてくれた。

まず食事の前に軽い飲み物をというのがローマの習慣だそうで、彼女のよく知っている店で僕はカクテルを頼む。彼女は36年前にイタリアに来て、川端氏と結婚し、数年前夫をなくしたが、お子さん2人と孫もいる。ローマ大学付属の外国語学校の日本語教師を長く勤め、停年退職した。亡き川端氏の過去の様子を聞いた。そしてイタリア生活について話を聞いた。法律が難しく運用されていて、人は何でも法律家を頼まざるをえない。役人は2時で終わる。そこで他の仕事をやる。例えばタクシーの運転手である。そうなるとう重の収入になるから課税され、この納税がむずかしい。そこで、法律家を頼むことになる。

息子さんが、大きい観点で物を見たいと、アメリカの学校へ行って、イタリアは後ろ向きだと悟り、北欧で就職したそうだ。視野の広い話である。

郵便物の送付の件を語ると、イタリアでは役人は担当の人によって事情が皆変わると言うのだ。日本では考えられない。

食事に行こうということになり、また自家用車で出かけた。「ここでは公共交通機関がよく発達していないので、自動車がないと不便です」と言う。めざすレストランは、周囲が駐車車両で一杯で、駐車する場所がない。30分も周辺を走り回ってやっと見つけた。大変な社会だ。路上に白線で囲まれたところが無料であり、これはもちろん一杯である。青線で囲まれた場所を探すのだ。そこに駐車するには、近くにある機械で駐車券を買う、という仕組みである。青の場所もな

かなかない。

食事は、前菜をとり、それはパスタなどが、その後セコンドというメインを取り、添え物を注文する。最近イタリアでも減量する人が多くなり、前菜とセコンドの片一方だけにするというのも増えたそう。これまでは太った人が多かったが、そのため最近太った人は減った、と言う。長くいる人だけあって、お陰で我々では注文できないものが出てきて、興味深かった。例えば、朝鮮あざみ（アンティチョーク）のつぼみのフライ（カルチョーフィ・アッラ・ロマーナ）が注文された。

食事が終わって、煙草を吸いに出ると言うのと、店外は暗いし、治安が悪いので「危ないですよ」と言うので、辞めた。

「ローマには乞食が多い」と言うのと、「ジプシーですよ」と。ローマでは学校まで子供を送る。これはヨーロッパ中そうだ。

私はスティーロへ行くのだが、彼女は初め、スティーロを知らなかった。会う前のメールで「スティーロはイタリア3大美観の1つだったのですね」とあった。私もそれは知らなかった。

ローマ3

2015年9月 三度目

南イタリアから帰りにローマへ寄った。ホテルは同じ「アトランティコ」である。どこのホテルでもそうだが、各部屋にミニ・バーがある。大抵冷蔵庫の中にある、とても値段が高い。部屋の小さな棚に赤ワインの小瓶が2本おいてあった。 Wifeは「これは、ウエルカム・ドリンクではないか」と言う、私は「ヨーロッパでは白ワインは冷やし、赤ワインは冷やさない、だから、これはミニ・バーの一部だろう」と言った。この瓶に紙がかけられていて、読んだら、やはりミニバーだった。

シティー・バスに乗ることにした。テルミニ駅前から頻繁に出ていて、ここでバス券が買える。我々はホテルで買っておいた。色々乗り方があり、途中下車が何回でもできるのと、途中下車しないでただ乗って廻るだけという一番簡単な方法とがある。我々は時間がなかったので、後者の1回乗りにした。こちらは少し安い。イアフォン・ガイドがついて、幾つか言語が選べるが、英語を選んだ。1時間半くらいでローマ中心部をまわる。壮大なローマの建造物に圧倒された。今度はローマにゆっくり来る必要があると思った。

夕食は、わがホテル前にあるホテルの高級レストランに入ろうという予定だったが、ここは夕方7時半から始まる。お腹がすいているし、レストランのオープン時間はまだしばらくあるので、ここはやめた。駅の中のスーパーに寄ってから、旅行社が推薦しているレストランを探して、入る。ここは2年前来たところだった。時間は早かった。フルコースを初めて頼んだ。といっても、前菜のパスター皿は半分づつで、メインつまりセコンドは2人で別々の物を頼んだ。Wifeはヒラメをポテトでフライにしたもの、私は仔牛のソテーで、薄い味のソースがかかっている。添え物も頼んだ。煮野菜だった。とてもおいしい。終わってからジェラートを薦められたので、1つだけとって食べてみると、とてもおいしかった。私はコーヒーだ。しめて勘定は49ユーロで、50ユーロ払うと1ユーロおつりがきた。私は「チップにしたら」とWifeに言い、ウェイターはそれに気が付かなかったので、チップを払う必要がない店のようだった。ローマは料理はおいしいの

ではないかと思う。

帰りがけに、中国人経営の雑貨屋があってワイフが入った。私はしばし店の前でタバコを吸いながら、中国人女性店員の顔を見ていたら、彼女はワイフを泥棒ではないかという目つきをして見ていた。イタリア人だったらそんな事はない。

ローマでは物売りが多いが、特にスマートフォンの自撮り棒が多い。中通りでもテントを張って多種多様な商品を売る黒人外国人が多い。

帰る日、11月1日、ホテルの部屋を出たら、掃除係の初老女性がワイフに「鞆は身体の前にした方が良い、取られるからね」とジェスチャーで教えてくれる。

ホテルマンは、「我々がカラブリアに行った」と言うと、「私は行ったことがない。行くつもりもない」と。「彼らは閉鎖的だ。ただし、親しくなるととてもよいそうだ」とのこと。「料理人に、シニョールと言ったら否定された」と言うと、「そりゃそうでしょう」と言われた。私が教授だと言うと、では「・・様」ですか、と言う。日本語に詳しいようだ。私は「・・・さん、で充分」と応じる。

ホテルに空港行きのハイヤーの運転手が迎えにくる。40分で空港に着いた。この初老の運転手にチップを5ユーロ出したら、彼は褒美を貰う小学生のように嬉しそうな顔をして受け取った。出し甲斐があった。ローマ空港の出発口付近は、2年前に較べてとても綺麗になっていたが、お菓子や飲み物がある便利な店がなくなっていた。

ローマ4

2016年9月 四度目

フィレンツェからローマへ行く。ホテルは「アリストン」といい、駅からすぐだった。初めてのホテルである。部屋に入ったらびっくりした。とても狭いのである。部屋の中央にダブルベッドがあり、その両脇は大人がやっと歩ける幅しかない。ワイフは文句をいい、私はベッドに寝転びながら考えた。部屋を代えて貰うか、わが旅行社の支店に要望してホテルを代えてもらうか、をである。ところが部屋の電話が鳴った。ワイフが受けると、フロントからであり、「何かトラブルはあるか」とのこと、さっそくワイフは「部屋が狭い」と答えると、「明日、代えるから」とのことだった。「朝食後、フロントに来て下さい」と言う。フロントからこういう電話があるのも不可解である。ホテルとしてもこの部屋はマズイと思っていたのかもしれない。

我々はテルミニ駅の中にあるスーパー・マーケットに行く。ここでは、エスプレッソの入った四角い小さなチョコレートがない。これを目指していたのだが、残念である。去年行った駅前通りのレストランへ夕食に行く。ここは分量が多く、安い、それほどおいしくはない。

帰りにホテルの前にミニ・スーパーがあったので入った。店員は二人いて、バングラデシュ人だった。一人は3年ローマにいて、一人は20年いる。彼は来年日本に行くという。日本の政治的エスタブリッシュメントは安定しているか、と聞くので、安定していると答える。「経済成長はどうか」というので、そんなに高くはない、しかし漸増である、と答える。例の求めているチョコレートがあるかときくと、「ない」とのこと。「今、気温が高いので、チョコレートが溶けてコーヒーが出てしまい、商品が駄目になるのを怖れて、イタリア中で作っていない。気温が低くなる来月(10月)に作られるはずである。これは韓国人と日本人が沢山買ってゆくものだ」と教えてくれた。

24日 土曜日。朝食後、言われたとおりフロントに行くと、「部屋を代えるから見てくれ」という。我々は1階(つまり2階)だった。5階を見せてくれる。かなり広い部屋である。「いいか」というので、「ずっとよい、けれどベッドがダブルベッドだ。シングルベッド2つがよい」と言った。だが同時に、わが旅行社のローマ支店に電話をして仲介して貰うとよさそうだと気がつき、電話でフロントと交渉して貰った。フロントは我々に「それでは4階を見せよう」といい、4階の部屋を見ると、シングルベッド2つで5階より少し広いので、了承した。

不思議なことだが、何でそんなに簡単に要求に応じるのか、なぜ初めに狭苦しい部屋に入れたのか。初めに、なぜ「トラブルはありますか」という電話がきたのか、分からないことだらけであった。それに1階と5階の部屋は、WC部分と部屋の間にはドアがない。また3部屋ともバスがない。部屋を移るには2時になると言うので、この間の事情を、わが旅行社のローマ支店に報告しに行くことにした。

この間、私の友人の未亡人Iさんと連絡がついた。翌日、お茶と夕食をすることになった。「今からわが旅行社にゆくのです」と言うと、「イタリアでは土曜日は休みだから駄目でしょう」と言われた。だが社の案内を見ると営業していた。日本の会社だからであろう。テルミニ駅からメトロに乗って二つ目、バルベリーニへ着いた。バルベリーニ二広場がある。中央にトリトーネの噴水がある。バルベリーニの作である。支店はすぐ見つかった。会社に事情を報告し、「いつも泊まっているアトランティコはすばらしく、部屋は広いのに、どうして今度は狭いのになったのか」など質問したが、「アトランティコでは偶然広かったのでしょうか」などという説明だった。

テルミニ駅に戻り、昼食を買って部屋で食べ、休む。夕食はよく行くジリオという小ぎれいなレストランで、3度目になる。いつもの老ボーイがいた。愛想がいい。「昨年会いましたね」と言うと、「そう、覚えている」とのこと。私は子牛肉を注文する。最後にジェラートとケーキを注文した。ここのジェラートはとておいしかったからだ。帰りがけに、ワイフはヴェネチア・ガラス店を見つけ、小物を買っていた。

25日 朝食時、朝食用の食堂の前で、入る人をチェックする係員がいる。この時は女性で、我々の部屋ナンバーを言うと、「部屋変わりましたね、今度の部屋は満足していますか」と尋ねた。情報がメモされているのだろう。

昼、共和国広場を散歩する。ここには古代のテルメがあるそうだ。今流行りのイタリーを見る。新しいタイプの店である。商店で、かつカフェでもある。近くに三越があるので、冷やかして入ってみた。1階と地下階しかない小規模のものである。店員は中国人と韓国人とイタリア人が多い、レジはほとんどイタリア人のようだ。商品はイタリア土産になるような物がほとんどだ。中国人の団体が入っていた。かつては日本人客が多かったらしい。女性の韓国人店員は日本語が喋れない。だから韓国人客が多いのだろう。もちろん客は中国人が一番多い。

テルミニ駅の近くで、ポテトをテイクアウトした。ここの店員は中近東の外国人だ。そして大変売り急ぐ。

このホテルのフロントの脇に、無料のコーヒー、ジュースとパンがおいてある。ウェルカム・ドリンクとある。チェックインの時、「どうぞそこでコーヒーなどをお飲み、お待ちして下さい」と言われた。コーヒーを飲むほど、時間がかかるのかと妙な気がしたものである。2日目も、私はここでコーヒーを飲んだが、ワイフは「ウェルカム・ドリンクなので、初めの日だけなのではないか」と言ったが、私は「いや、このホテルは毎日我々をウェルカムしているので飲んで良いのさ」と応じた。今回のイタリアのホテルではしょっちゅうベッド・メイキングをしにくる。

テルミニ駅構内で、ただ座るためにエスプレッソを頼んで、とある場所に座ろうとしたら、座るのを断られた。それはカウンターでだけ飲める物で、座れないのだった。

Iさんとお茶をした。彼女はマイカーで来た。ここでは駐車場所を見つけるのが難しい。ホテル内の喫茶部でおしゃべりした。彼女の話はこうだ。彼女は日本人学校で日本語を教えている。最近その高等部ができた。そこの日本人高校生は日本の大学に入りたいと思うそうだ。生徒たちは、日本の大学は、入るのが易しいし、楽しいから、行こうと思っているそうだ。日本の大学では帰国子女の枠で小論文の試験があり、そのため彼女はそれを教えている。この小論文と英語くらいで入学できる。イタリアでは大学は一生懸命勉強しないと卒業できない。アルバイトをする時間は無い。ところでイタリアは就職難である。大学を卒業してもほとんど職が無い。Iさんの娘は、大学を出て、国連機関の日本関係のある臨時職に応募したら、採用は一人だったが130数人が受験した。彼女は採用され、数年後に正職員になった。娘の夫は大学の建築科を出たが、就職が無い。そこでアルバイトで生活している。

この話を聞いて分かったのだが、フィレンツェで皮製品店の夫人の義弟が建築家だと言っていたが、職がなく、兄の店を手伝っていたのだろう。

イタリア人は生活が苦しい。年金は6万円である。若い人は親に養ってもらおう。しかし次の代には悲惨となる。若い人は次の世代を支えられないだろう。イタリアでは、役人が強い。政治家が新しい案を出しても、役人が言うことを聞かない。一方、政治家は高給をとる。そして政治家は市民の生活を配慮しない。ブランド品は、イタリアでは、お屋敷をもっているような裕福な人が買う物だ、と。以上である。

イタリアの有名ブランドには、ベネトン、グッチ、フェラガモ、ブルガリなどがある。後で調べたら、イタリア社会は以下のとうりであった。若年層の失業率は40%を超えた。15歳から24歳の5分の2が無職である。知識階級は、47%が無職である。そこで国外へ移動することになる。過去10年間で大学卒業者のうち40万人が国を出た。国内で職を見つけた若年層の47%が薄給に不満を持っている(2016年)。イタリアの企業は、開かれていないで、身内びいきで、血縁尊重である。搾取をし、老人差別が根強い。大学を出て外国へ行って働いた人はイタリアには帰らない。なお、イタリアでは地元志向で、出身地主義が強い。Iさんの息子が北欧へ行ってしまったのは、こういうことだったのだなと納得がいった。

なお、イタリアでは銀行で不良債権が増加して、困っている。約100兆円だとされる。イタリアとギリシャでは2010年に経済危機に陥った。公的債務はイタリアはGDP比135%で、EUではギリシャについて悪い。2013年にGDP(国内総生産)は2兆ドルである。GDPが、ドイツ、フランス、イギリスに次いで、ヨーロッパでは第4位である。経済成長率は1%程度である。人口は6080万人である。ローマは人口271万人である。2015年に在伊日本人は13299人で、意外と少ない。

お喋りが終わって、最近人気のレストランへ車で連れていってもらった。今回の旅で食事の初めにパンが出てくるのに気がついた。人々はそれに酢とオリーブ油をつけて食べている。Iさんによれば、そうなったのは最近のことであり、昔はメインディッシュの時だったと。私は、新基軸で話題になっているハンバーグをとる。しかしどの点が新しいのかよく分からなかった。

また、ホテルの星の数は客室数にもよるとのことと、あきれてしまった。優秀な小規模ホテルでも4つ星でなく3つ星になってしまうのである。Iさんは、わたしが煙草を吸いにレストランから外に出るとき、襲われはしないかと、非常に心配してくれる。ここは手洗いで水を出す時、

足でペダルを踏む様式である。これは初めて見たものである。最後に支払いで1ユーロ残ったのを、私は受け取ろうとしたら、「これはチップとして残して」と言われてしまった。

帰りに車でコロッセウムのそばを通った。一部がコンクリートで修復されていて妙だった。夜のサンタマリア・マッジョーレ寺院の前を通った。ライトアップされていて、昼間見るのとはまた違って綺麗である。

イタリアの南北の差について言えば、1946年に王制が終わり、近代以降、北イタリアは工業化した。第2次大戦後も北部で工業化が進んだ。南部では進まなかったで、今では南北問題が発生している。南イタリア人が北イタリアに出稼ぎに行く。イタリア・マフィアがアフリカの不法移民を北イタリアに流入させている。南イタリアは失業率が高い。南の大学卒は北の半分である。またイタリアは地方主義が強い。よく言えば愛郷心だが、悪く言えば田舎主義である。自分の町がすべてであり、国家を考えない。

26日 タクシーでサンタンジェロ城へ行く。疲れたので方針を転換し、まず行きたいところへタクシーで行くことにしたのだ。城の正面にはサンタンジェロ橋があり、テベレ河にかかっている。タクシーは橋の前で止まる。この橋を歩いて渡った。この装飾はベルリーニの設計である。城自体がムゼウム(=博物館)だった。チェリーニの彫刻があるはずなので、係員に聞くと「今、監獄部分に入っている」とのことだった。残念だった。城に登るとローマ全体がよく見えた。景色が良い。ヴァチカン宮殿も近くに見える。この城はハドリアヌス帝時代の135年に建てられ、139年に霊廟として完成した。しかしその後、要塞となる。これは城でもあり監獄でもある。観光客は欧米人が多いようだった。中国人はまだこの価値を知らないのだと思う。城の一番上に天使の像が建っている。昔ローマにペストが流行り、大天使ミカエルが舞い降りてきて終焉させたとの伝説からである。そのテラスまで登った。この天使像は16世紀に建てられた。ここはオペラ「トスカ」の舞台になった。「トスカ」は私の大変感激したオペラであり、トスカはここから身を投げたのだと、思いを馳せたりした。

見終わってカンポ・デ・フィオーリ(花の広場)を見に行く。途中でピザをシェアして食べるが、とても大きい。広場はなかなか見つからない。随分探してやっと見つけた。今は市場になっていた。ここで野菜、肉、日用品など、あらゆるものが売られている。ジョルダノ・ブルーノ(1548-1600)の像がここにある。私はこれが見たかったのだ。僧服をまとった姿である。ブルーノはドミニカ派の僧で大学者。トンマーゾ・カンパネッラの先輩にあたる。ナポリ近郊の生まれである。宇宙は無限である、地球が回転しているとし、コペルニクスの地動説を擁護し、アリストテレスを批判した。これらの理由によって異端とされた。著作に『無限、宇宙と諸世界について』などがある。彼は亡命し、帰ってきたヴェネチアで捕まった。サンタンジェロ城に監禁され、1600年、この広場に連行され、火あぶりの刑になった。感無量である。

隣の広場はファルネーゼ広場で、そこに立派な邸があって、邸には予約の観光客が入っていた。見物が終わった人に聞くと、素晴らしかったと言う。観光のためだけではなく、実際に中に住んでいる人もいようだ。銃を持った護衛員がいて、怖い。

イタリアから日本の北大に留学し、ドクターを取った女性によると、イタリア人は広場が中心で、人と会うのも広場であると言う。

さて帰ろうと思ったが、帰り方が分からず、困った。広場で針金細工をしている職人に聞くと、「近くにメトロ駅はなく、タクシー乗り場は無い。テルミニ駅にはある。バスがテルミニまで出ている」という。メトロもタクシーも使えないとすると、歩くかバスしかない。そこで思い出し

た。来る時、たしかヴィットリオ・エマルネレ2世大通りを歩いており、その通りにはバスが走っていた。そこでまず大通りに出た。近くを通った日本人の大学生四人組にここの場所を聞くと、直線距離でテルミニ駅へ行けることはわかったが、距離が長そうだ。くたびれているので死んでしまいそうだ。そこでバス・ストップらしい所まで行ってみた。「テルミニ」と書いたバスが丁度通りかかったので飛び乗った。だがバス券を持っていない。これでいいのかと不安になった。バスの中で切符が買えるのではないかと思ったのだ。しかし違うようである。切符を売る器械はなかった。乗客に聞くと、バスに乗る前に券をあらかじめ買って置いて、バスに乗ってから券を検札器械に入れるとのことである。さもないと罰金50ユーロ払うようだ。しかしバスを降りて券売り場を探すのは大変なので、さしあたりただ乗りをさせてもらった。検札員が乗り込んでくると、罰金を払うはめになるので心配だ。降りる際、4人の少年がいて、エジプトから来たという。喋り掛けてきたが、エジプト語なので分からない。バスは三越の前を通ったので、テルミニの傍に来たことが分かって安心した。ローマでは、メトロ、タクシーのシステムが未発達なのがわかった。個人旅行には不便である。Iさんの言うように、車が必要だというのがよくわかった。

バスを降りてから、いつものミニ・スーパーでジュースを買う。その隣は床屋で、働く人はほとんど黒人だった。ここでは煙草を恵んでくれという人が多い。ホテルの近くにレストランがあったので簡単に夕食をすました。この食堂に辻音楽士が来るのだった。

27日 前の日にドア・ボーイにバス券の買い方を教わると、ホテルの前にスーヴェニア・ショップがあり、そこで買えると言う。今朝、その店に入ってみると、イタリア人だろうと思われる中年女性がいて、片道切符を2枚買った。一枚で1人100分乗れるものである。この店では煙草も売っていた。ナヴォーナ広場へタクシーで向かう。ベルリーニの彫刻がある噴水が中央にある。オペリスクが立っていて、その基に作られている。「四大河の泉」(1648-51)という。この前後つまり南北にも、ムーア人の噴水(ベルリーニ設計)、ネプチューンの噴水がある。ここは1世紀に作られたドミティアヌス競技場が元になっている。

ナヴォーナ広場の横面には大きなサンタニェーゼ・イン・アゴネ教会があり、ボッロミーニの設計である。ベルリーニのライヴァルである。ワイフは中を見に入った。広場には水を汲みにくる人が居た。泉が湧き、その水道があるのだ。ジェラートを1つ食べ、軽い昼食としてチーズのいも団子をシェアして食べる。これは味の強いものだった。この店のウエイトレスはかつて広場の向かい側にある店にいた。その店が東京に支店を出したので、彼女は日本で少し働いたと言う。その後、今の店をオープンしたので、日本から戻って、ここのマネージャーを勤めているという。

帰りは、近くの例の大通りに出た。ローマ観光では市中にホテルを取るべきだと思う。バスを待って乗ったが、今回はバス券を持っているから安心である。バスは大変混んでいた。テルミニ駅に着いて、降りてからまた途中のヴェネチア・ガラス店に行き、ワイフは買い物をした。愛想のよい主人である。

夕方、例の店へ食事に行った。ミラノ風カツレツをとったが、ミラノの方がおいしいようだ。温野菜もとる。ボーイがシャンパンをサービスしてくれた。日本語のメニューは簡単に書いてあるから、イタリア語のメニューの方がよいとワイフは言う。最後にコーヒーとお茶を注文したら、コーヒーはエスプレッソだった。種類を言わないと自動的にエスプレッソになるのだろうか。イタリアでは飲み物はコーラやファンタが多い。我々はあまり好かないので、いきおいリンゴ・ジュースやオレンジ・ジュースに限られてしまった。だがイタリア料理のように味の強い物には

コーラやファンタが合うのかもしれない。ホテルの朝の食事に野菜がほとんど出なかった。

街では黒人の物売りが一杯である。カメラの自取り用具を売る人が多い。街では入れ墨をした男女が非常に多い。しかしこれらはプリントかもしれない。

ベルリーニの彫刻を見ようと、国立ボルゲーゼ美術館に行く予定であったが、疲れていて行けなかった。Iさんによると、ここは予約をした方が良いとのことだった。

ジャン・ロレンツォ・ベルリーニ（1598-1680）は、バロックの大彫刻家で建築家である。ローマで多くの建築物を設計した。サン・ピエトロ寺院の前の広場（1656-67）も彼の設計による。彼の父はピエトロ・ベルニーニで、彫刻家である。ジャンはナポリ生まれで、一家は1605年にローマに戻り、枢機卿ボルゲーゼの保護を受けた。ジャンは、教皇ウルバヌス8世から依頼され、ヴァチカンの天蓋を作る（1624-38）。これはバロックの傑作というものである。サンタ・マリア・マッジョレ大聖堂の洗礼堂に大理石の浮き彫り「聖母被昇天」を作り、「クレメンス八世の戴冠」も彫る。ベルリーニの彫刻作品には、「プロセルピナの略奪」（1622、ボルゲーゼ美術館）、「ダビデ像」（ボルゲーゼ）、「アポロントダフネ」（1625年、ボルゲーゼ）、「聖テレジアの法悦」（サンタマリア・デルラ・ヴィットーリアのサンタ・テレザ礼拝堂）、「船の噴水」（スペイン広場）、「トリトーネの噴水」（バルベリーニ広場）、「ミネルヴァ・オベリスク」（ミネルヴァ教会）、「福者ルトヴィーカ・アルベルトーニ」（c.1671、サン・フランチェスコ・アリーバ教会）などがある。彼の建築作品では、モンテチトーリア宮殿（1650-97）、サンタンドレア・アル・クイリナーレ聖堂（1658-61）、キジ・オデスカルク宮殿（1664-）、サンタンジェロ橋、などがある。

28日 ローマ出発の日だ。時間が少し出来たので、近隣を散歩する。立派な建物があり、建築家協会と水道関係の団体が入っていた。その前に緑の多い公園があり、老人たちがベンチで休んでいる。日本ではあまり見ない景色である。ここで軽い昼食をした。空港まで送りの車があり、運転手は女性で、元気な人だが英語がわからないのが残念だ。空港の免税店で煙草を買うが、免税店は高いことが分かった。今後はよそう。帰りの飛行機内で日本の若い男性と会った。2日間の初めてのローマ旅行をし、とてもよかったと言う。このまますぐ仕事だという。日本人はよく働く。

新千歳空港で夕食に蕎麦を食べた。イタリアでは食べ物で、すすめるものがないので、蕎麦のすすり方を忘れてしまったかのようだ。イタリア人は快活である。欧米人は笑顔で接する人が多い。ロシアや中国とは違う。日本はその中間だろう。